

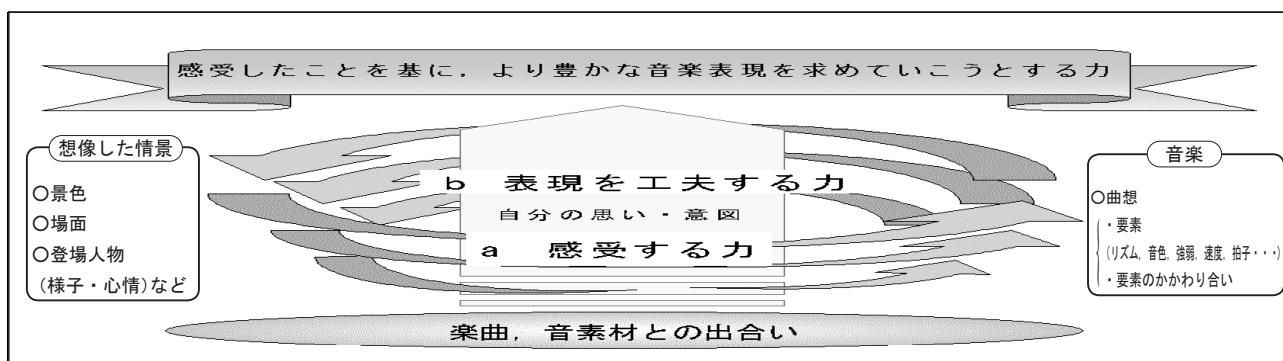
音楽科

1 育成したい「思考力」

- a 感受する力：音楽を形づくっている要素や、その関わり合いから生まれる曲想を基に、音楽の表す情景を想像する力
- b 表現を工夫する力：音楽から想像した情景と結び付けながら、音楽を形づくっている要素や、その関わり合い方を、自分の思いや意図をもって創意工夫する力

小学校学習指導要領において、表現及び鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として示されている。そこでは、音楽のよさやおもしろさ、美しさを感じ取る際に聴き取るべき音楽の要素が明確に示された。

本校音楽科では、その〔共通事項〕に示された音楽の要素を基に感受したり、表現を工夫したりすることを重視し、そこで必要とされる力を上記の「思考力」としてまとめた。



a 感受する力

音楽は、リズムや音色、強弱等のさまざまな要素により特徴付けられている。そしてこれらの要素の関わり合い方によって独自の構造をもち、それが楽曲に固有の曲想を生み出す。

これら楽曲の独自性を基に、そこから情景を想像する力が「感受する力」である。音楽的な刺激を受け取るという受動的な面にとどまらず、その刺激に対して自分の心象を形成するという能動的な面も含めて捉えている。

また、実際の学習においては、『タッカ』のリズムが弾んでいて、踊っているような曲だなあ。」と音楽を特徴付けている要素から情景を想像することもあれば、逆に「お祭りのような曲だ。」と最初に情景が浮かび、続いてその根拠となる要素を聴き取っていくことであろう。感受する力は、このように音楽の要素と情景の双方を行き来しながら高められていくのである。

以下に「感受する力」の実践例を紹介する。

第4学年「拍子の違いを感じ取ろう -『エーデルワイス』『トルコ行進曲』『ラバースコンチェルト』『メヌエット』-」

【本単元で育成したい「思考力」】

拍子と音楽を形づくっているその他の要素との関わり合いから生まれる曲想を基に、音楽の表す情景を豊かに想像する力

音楽鑑賞をする際に、強弱、速度、音色、高さ等、音楽を特徴付けている要素に着目して旋律の違いを聴き分けることが重要である。本実践では、拍子による感じの違いを捉えた後、『メヌエット』の鑑賞において、長調と短調の二つの雰囲気の違い『メヌエット』を聴き比べた。そうすることで、演奏している楽器の音色や曲の速度、明るい・暗いといった調による感じの

違い等、拍子以外の要素に気付いていった。気付いた要素を基に、再度曲をじっくりと聴き味わうことで思い浮かぶ情景を膨らませ、「1曲目はうきうきした様子で軽くステップを踏みながらターンして、にこにこ笑顔で踊っている。」や「2曲目はちょっと薄暗いところで、悲しそうな表情の人がゆっくり歩くように踊っている。」というふうに情景をより豊かに思い浮かべていった。

このように、音楽を特徴付けている拍子と、音色、速度、調といったその他の要素とを結び付けて情景を豊かに想像する力が「感受する力」である。

①	感じ	様子	②	感じ	様子
音色	ピアノ	はげしく元気 にこにこ 楽しい うれしそう	音色	リコーダー	広い ちやうど さびしい 静か い
速度	なめらか	ゆっくり 楽しく ゆきゆく	速度	ゆったり	つかれて ぐっすり 寝ている 静か な
調	明るい	みんな 楽しく 広い えがお	調	暗い	おどろいて おどろい

【要素を基に情景を想像する】

b 表現を工夫する力

既存の楽曲の演奏を工夫する際には、自分の思いや意図を明確にもつことが求められている。そして、その思いや意図に合った表現をするために、音楽を形づくっている要素や、その関わり合い方を創意工夫するのである。

具体的には、例えば「速度の工夫」のように要素自体を工夫することもあれば、「旋律の呼応」のように単一要素の関わり合い方の工夫、さらには、「旋律とそれを演奏する楽器」のように別の要素の関わり合い方の工夫もある。

なお、この「表現を工夫する力」は、上で述べた「感受する力」に支えられていることは言うまでもない。情景を想像することで、「このような音楽にしたい」という思いが一層強まるからである。また、音楽を形づくっている要素が、楽曲にどのように働きかけるかを感じ、理解していなければ、要素を選んだり組み合わせたりすることもできないからである。

以下に「表現を工夫する力」の実践例を紹介する。

第3学年「音を重ねてアフリカの様子を表そう ―『マンガニ、雨とおどろう』―

【本単元で育成したい「思考力」】

アフリカの音楽からその情景を想像し、選んだリズムや音色を重ねて表現を工夫する力

本実践では、アフリカの音楽からその情景を想像した後、それぞれが選んだリズムや音色をグループで重ねてアフリカの様子を表す音楽づくりに取り組んだ。その際、既存の楽器だけでは音色に限られるため、さまざまな音色に触れられるようアフリカの民族楽器に似た楽器を準備し自由に選択できるようにした。それらの楽器を実際に鳴らして音色を聴き、リズム、強弱、音色を変えながら自分たちの表したいアフリカの情景に適しているのかを探っていった。

その後、自分たちのつくったアフリカの様子を表す音楽を演奏し、他のグループと聴き合った。「バッファローの足音を、ボンゴやクラベス等のいろいろな楽器の音色で表しているの、たくさんいる感じがしたよ。」「バケツボンゴをだんだん強く細かく叩いていたので、シマウマがだんだん近づいてくる感じがしたよ。」等、友達の演奏の工夫に気付いていった。自分たちの演奏にはない他のグループの工夫を取り入れたり、自分たちの演奏の工夫と比較したりすることで、表したい情景へと近づけていった。このように、音楽を形づくっている要素の関わり合い方をさまざまに変えながら、情景にふさわしい表現を創意工夫することが「表現を工夫する力」である。



【情景に合わせた演奏を聴き合う】